

北総分区集会講演「粒が立ってくる伝道」使徒 13:1-3

2021. 9. 17 ユーカリが丘教会 牧師 大串眞

序 今期主題「聖霊に導かれ、神の召しに応える一使徒言行録を学びつつ」

今季主題に従ってこの北総分区集会では使徒言行録について学ぶということになっています。使徒言行録については、皆さんは、それぞれの教会で、また今までの信仰生活の中で、触れておられることだとは思いますが、一応はじめての方もおられるかもしれませんので、「使徒言行録とは」ということから触れておきたいと思います。最もわかりやすく言えば「初代キリスト教会の起源と発展の歩み」と言ったらよいかと思います。もう少し内容に即して言いますと、使徒言行録は、昔から、「聖霊行伝」と呼ばれてきました。使徒言行録 2 章に聖霊降臨について語られています。その時から初代キリスト教会が誕生して、使徒たちの活躍を通して発展していくのですが、それは使徒の活躍のようですが、その背後に、聖霊の働きがありますので、聖霊による伝道の足跡が記されているというわけですね。ちなみに、その聖霊行伝は、未完と言われていまして、それは、ずっと長いキリスト教会の歴史がそこから続いたというだけでなく、現在も、その続きの中にある。今もそのような聖霊の導きの中にあるとして読むものということが、まずあるのかなと思います。

そして、次に、使徒言行録の区切り方ということですが、いくつかの見方があるようでして、15 章エルサレム会議の前後ということで、2 つに区切る仕方があります。次に、前半はペトロの活躍、後半がパウロの活躍と区切るありかたです。最後に、1:8 の見取り図に従うというものです。

1 : 8 あなたかたの上に聖霊が降るとあなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また地の果てに至るまで、わたしの証人となる。

これが聖霊による伝道の見取り図となっていて、この通りに伝道が展開していくのです。前半ではエルサレム教会が中心に展開があります。そして、後半は、シリアのアンティオキア教会が中心になっています。このアンティオキア教会から、送り出されて、パウロによる伝道旅行が展開していく。そして、最後は、裁判になって護送されるようにしてローマにまでいく。そういう展開となっています。これが全体像ということですが、

1、アンティオキア教会にて、粒が立ってくるとは

今日、読んでいただいた 13:1-3 は、アンティオキア教会のことが記されています。最初は、アンティオキア教会に属する、何人かの信徒たち、伝道者、また教師たちのことが記されています。これらの人々が、どういう背景を持っているのか。ここのところだけではよくわからないところです。そして、ここには示されていない、無名の教会の

信徒たちもいたのです。

2節「彼らが主を礼拝し、断食していると聖霊が告げた。『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために』そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。」

ここで、注目していただきたいのは、まず、このアンティオキア教会では、主を礼拝するということが、真剣に、大切に、喜びをもってなされていたということです。それは、なんでもないことのように思われるかもしれませんが、ここでは、最も大切なこととして語られています。つまり、基本的なこととして、礼拝をしている群れ、つまり、教会ですね。そこに聖霊が働くということです。聖霊が働いてどうなったのかというと、バルナバとサウロが、選ばれて、地の果てまでの伝道へ遣わされていくのです。そういう伝道者が生み出されていくのです。そして伝道者によって教会が次々と生み出されていく開拓伝道がはじまるのです。ここでのサウロが後に、パウロと名前を変えて、伝道旅行の第一線で活躍していくことになります。

しかしですよ。皆さん、聖霊によって送り出されたのは、実はパウロだけではなかったのです。パウロを導いた先導役のバルナバの名前があげられています。確かに、この二人は重要な役割を果たしたでしょう。しかし、その二人だけでなく、無名の指導者たち、信徒たちが実はいたのです。背後で、祈って支えていた人たちがいる。そして、使徒言行録をずっと読み進めていくとわかりますが、表にはあまり出てこない、名わき役たちがたくさんちりばめられているのです。実は、今日は、そのわき役たちに焦点を当ててみたいと思いました。

なぜそのようなわき役のような人たちが登場しているのか。読んでいて、不思議に思うことがあります。それは、どうも、そのような無名ともいえる多くの信徒や伝道者たちも、真実な礼拝を通して、聖霊の導きを受けているのであります。そして、それぞれの仕方で、役割を果たしているのです。

福音が語られ、真実な礼拝が守られるところ聖霊が働くと、実は、一粒一粒が立ってくるのです。一粒一粒が立つという表現は、日本人の家庭に育った方なら、よくわかるのではないかと思います。お米を炊くとですね。米粒が立ってくるのです。艶が出て、米粒が立ってくる。昔ながらの炊き方をご存じでしょうが、カニの穴ができています。わたしはボーイスカウト出身で、キャンプで、お米を炊くことをよくしていました。上達すると、飯盒ではなくて、羽釜で炊くのです。少しおこげもでき、カニ穴から湯気が立っている。ツヤツヤとお米が立っている。それはもう、おかずなんかいらなくらいおいしいですね。

教会でも、同じことが起こってくるのです。たくさん的人数で一緒に礼拝しているときは、わからない。でも、やがて、一粒一粒が立ってくる。一人一人の個性、賜物も、浮かび上がってきます。またそれぞれが用いられていく。そういう粒が立ってくる。

名わき役たちが使徒言行録にも登場している。十分詳しい情報ではないので、想像で補いつつの人物像ではありますが、今日はわたし自身が捉えているわき役たちを少し紹介してみましよう。

2、使徒言行録の名わき役たち

① バルナバ つなぎ役に徹した人

バルナバについては、皆さんよくご存じではないかと思えます。彼は、4:36 に紹介されています。「バルナバ」とは慰めの子という意味で、人々から呼ばれていましたといいます。かなり裕福な家の出であります。それは別として、その名の通り、バルナバは慈しみの人でした。誰もが認めるところだったのですね。そのいとこは、ヨハネ・マルコです。11:19 節以下に、アンティオキア教会のメンバーのことが紹介されていますが、22 節からエルサレム教会から派遣されたバルナバがとても良い働きをしたことが記されます。その彼が、25-26 節では、バルナバが、サウロが故郷のタルソに埋もれていたところを、このアンティオキア教会に連れてきて、以後一緒に活動することになります。11:30, 12:25 バルナバはサウロと組んで、一緒にエルサレム教会とアンティオキア教会とを何度も往復しています。つまり、サウロは、ついこの間までキリスト教会を迫害する側の人間だったので、キリスト教会の中でも、彼のことを警戒し、または、遠ざけられていたのですが、そんなサウロが、後に、パウロとして第一線で活躍していくためのつなぎの役割をバルナバはしていたのです。サウロが第一線で活躍するまで、つなぎの役割、つまりクッションです。また、教育者でもあったのでしょう。人々がサウロを非難するところで、「まあまあ」ととりなし、「長い目で見てやってくれよ」と空気をあたたかいものにしていたのです。サウロがアンティオキア教会でも、よい働きをして、信頼されいよいよ伝道旅行へ派遣されるときがきます。その際は「バルナバとサウロ」と表記されています。13:2 やがて「パウロとその一行」13:13 となり、また、第1回目の伝道旅行で挫折して、途中で逃げ帰った、ヨハネ・マルコを巡って、第2回目の伝道旅行の際に、バルナバは、マルコをつれていこうとし、パウロはそれに反対して、結局袂を分かつことになってしまいました。その後、バルナバは使徒言行録で、登場しなくなります。バルナバにとって、ヨハネ・マルコは、いどこでもありましたが、おそらく基本的にバルナバは、優しくかったからでしょう。以前はサウロをかばい、こんどは、ヨハネ・マルコをかばうのです。しかし、そんなバルナバは、フェードアウト、次第に使徒言行録の舞台から消えていってしまうのです。でも、バルナバはそれで本望だったでしょう。彼にとっては、一番前に出るのは、性に合ってなかったからです。彼は二番手に甘んじることをむしろ、よしとして、生涯、わき役に徹したのです。しかし、このようなクッション材のような人もいて、事は進んでいくのです。

② ヨハネ・マルコ 自分を取り戻した人

そんなバルナバのいとこ、ヨハネ・マルコは、とても興味深い人物です。彼の家は、エルサレムの初代教会の家の教会の一つとなっていたようです。12:12 まだ青年だったころ、バルナバに導かれて、第1回目の伝道旅行に同行するのですが、途中で挫折して帰ってしまいました。13章13節 この辺りは、大変厳しい道のりだったようです。でも、ちょっと軟弱だったようです。後で、15:36-41 に第2回目の伝道旅行を出発する際の話が出てきますが、先ほど、申しましたように、ヨハネ・マルコを巡って、パウロとバルナバは激しく対立するのです。今まで大変良いコンビだったのです

が、仲たがいをしてそれぞれの道のりに進みました。これは、ヨハネ・マルコのことだけでなく、クリスチャンだけドユダヤ人らしくふるまうべきという伝統的な態度にバルナバは立っていたようで、そのことでもパウロは対立するのですが、まあ、とにかく、これは、とても悲しい出来事でした。しかし、こういう汚点のようなことをなぜあえて記しているのかということですが、おそらく、後に、立ち直った際の、ヨハネ・マルコのことを著者が知っているからです。この使徒言行録を著したのは、医者 of ルカとされています。

この次に紹介しますが、ルカは、パウロがローマの獄に囚われた時も、同行しています。そのローマの獄中におきまして、パウロの言葉として、ヨハネ・マルコについて、とても信頼していると表現で再び登場してくるのです。

たとえば、フィレモンへの手紙 24 節「わたしの協力者たち、マルコとアリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくとのことです。」

コロサイ 4:10 「わたしと一緒に捕らわれの身となっているアリストアルコが、そしてバルナバのいとこマルコが、あなたがたによろしくとっています。」

また、とても、興味深いことに、1ペトロ 5:13「わたしの子マルコが、よろしくとっています。」皆さん、これはどういうことが起こったか。少々想像も膨らませながら、推測していただきたいのです。若い時に挫折したヨハネ・マルコですが、後にパウロに仕え、また、ペトロにも仕えて、とても信頼される人物として成長しています。そして、皆さん、このヨハネ・マルコこそが、マルコによる福音書を記しているのです。ペトロの秘書として、イエス様の言動にも精通していましたし、パウロのもとで、福音のなんたるかよく学んでいたのです。マルコによる福音書はローマで書かれたとされています。当時のローマは、キリスト教に対して迫害の厳しい中でした。そんな中で他の福音書のベースとなるようなとても重要な福音書を記したのです。ちなみに、マタイ、ルカの福音書は基本的にマルコ福音書をベースにして、他の要素もいれながら書かれたといわれています。そんな大事な福音書が、ヨハネ・マルコによって書かれたのです。わからないものですね。若いうちの一度や 2 度の失敗や挫折などなんでもないのだということが、伝わってきます。若いうちだけでなく、わたしたちは、挫折したり、失敗したり、行き詰ってしまうこともいろいろあるのですが、そういうことも含めて、神様は、豊かに用いてくださるのです。直接、このような主題を使徒言行録が取り上げていないにしても、そういう含みがあるのだと思われます。そういう含みのある書き方をしているのです。

③ ルカ 謙遜を学んだ人

先ほど、医者 of ルカが、この使徒言行録書を書いたとの説を紹介しました。実は聖書学的にはいろいろと議論されているそうなのですが、わたしは、基本的に、ルカが書いたという前提に立っています。そして、ルカによる福音書に次いで、続刊として使徒言行録を書いています。では、この医者 of ルカがどこで、この福音書に登場しているかということ、使徒言行録に直接登場しているわけではないのですが、やはり、登場しているようなのです。

今日は、開会礼拝として、富里教会の吉田和子先生が、語ってくださったところ、そ

れは、使徒言行録 16 章の 6 節以下ですね。パウロたちの行先を、聖霊が禁じたり、イエスの霊がそれを禁じたりしながら、彼らは、トロアスまで導かれていったことが説かれていました。

そしてパウロが枕辺に見た幻の中で、マケドニア人が助けを求めているのですね。それを召しと信じて、パウロたちは、海を渉っていったという展開となるのです。聖霊による伝道ですね。そのマケドニア人の言葉を聞いた後で「わたしたちはすぐに」と「神はわたしたちを召して」「わたしたちはトロアスから船出して」と続くのですが、突然「わたしたち」が出てくる。これもいろいろ説があるようですが、この「わたしたち」の中に、医者ルカがいると推測されてきました。ある人の大胆な想像を膨らませた仮説を読んだことがあります。この使徒言行録を書いた著者ルカは、最初、医者として伝道者パウロと出会っている。

最初に聖霊に禁じられて、フリギア・ガラテヤ地方を通ったとあります。パウロは、伝道旅行中深刻な病にかかっています。はっきりとしたことが書かれていませんので、憶測ですが、マラリヤ熱なのではないかと推測されています。眼の痛みや頭痛がある。伝道旅行どころではない。療養が必要だったのです。ガラテヤの教会が後に建つことになる、ガラテヤの伝道はおそらくそのような、病気療養の意味があります。そしてそこで医者ルカが出会っている。伝道者パウロと出会っただけでなく、生ける主キリストと出会っている。ルカの悔い改めと信仰に入ることが起こっている可能性があります。そして、ある人の大胆な解釈では、ルカの故郷はマケドニアなので、ルカの話のパウロが治療中とかに聞いたことが、あのマケドニア人の幻に関係しているのではないかと。ちょっと想像力たくましくすぎると思われるかもしれませんが、少なくとも、医者ルカに強烈な出会いがあって、彼は、医者としてだけでなく、パウロの伝道を助ける者の一つとして旅に同行するようになった。

そして、先ほどのヨハネ・マルコのところでも、紹介しましたが、フィレモン 24、コロサイ 3:14「愛する医者ルカ」とうりますように、最後の最後まで、パウロと旅を同行するようになったのです。

最近、『パウロ—愛と赦しの物語—』という映画を観ました。パウロがネロ皇帝の迫害の時に、ローマで捕らえられて牢獄に入っていた時のことを中心に描いています。その獄中のパウロと友人として最後まで、共にいた人物が、ルカです。彼は医者だったからか、お金の力もあって、最後まで、パウロの獄中を訪ね、パウロから話を聞いて、ルカによる福音書、使徒言行録を書き上げていきます。

お金の力で、ルカが、パウロの獄中に最後までいることができたというのは一つの説でありまして、また、ある説では、彼は医者としてローマの市民権を持っていたにも関わらず、奴隷となった。だからローマへの船旅、そして、最後の最後までパウロの身の回りのお世話ができたのではないという。これも、とても興味深いことです。

なぜ、そういうのか。ルカの書いた、福音書と使徒言行録では、旅をテーマとする箇所がたくさんあるのです。そこで、旅の同行者は主イエス・キリストであるということを中心に語られている。しかも、謙虚に、奴隷として仕える主の姿がある。それは、ルカ自身が、パウロを通して、その伝道旅行を通して、出会ったことが反映されているからだという。

金持ちが謙虚させられるとか、低くされていた者が引き上げられるという話がたくさん出てくるのですが、これは、医者ルカ自身が、謙遜を学んだことと関係しているとも言われています。

④ プリスキラ 信徒伝道者の鏡

最後にどうしても、この人のことをご紹介したいと思っていたのは、プリスキラという女性です。一信徒です。当時、女性の社会的な地位は低かった。でも、初代の教会において、彼女ほど伝道者として活躍した人はいないというくらいの働きをした人です。

使徒言行録 18:1~4。アキラとプリスキラとして出てきます。プリスキラはアキラの妻です。彼らはユダヤ人のキリスト者で、ローマですでにできていたキリスト教会にて洗礼を受け、クリスチャンになっています。ローマでユダヤ人への迫害を受けて、コリントの地に移ってきました。アキラは、テント造りという職を持っていました。ユダヤ人というのは、子どもの頃から知的な教育という点でも徹底していました。それと同時に、必ず職業訓練もしたのです。手に職を身に付けさせる。学業と職業。だからユダヤ人はとてもどこにいてもとてもたくましかったのです。パウロも、テント職人としての腕を持っていました。同業者ということもあり、アキラとプリスキラの夫妻とパウロはすぐに打ち解けて意気投合しました。この時以来、友人として、仲間として、パウロの伝道、つまり、初代教会の伝道に多大な貢献をしていくことになります。

第2回の伝道の最後、エフェソに、アキラとプリスキラは、残っています。パウロは一旦、エルサレム教会、アンティオキア教会にかえって再び、伝道旅行に出発します。このエフェソにアポロというとても雄弁な新進気鋭の伝道者が流れつきます。話はとても力があって人々を魅了する力があります。しかし、どうもへんなのです。この若き伝道者の話を聞いて、いったいどこが違っているのか。教え直している場面があります。18:24-26

そのところでは「プリスキラとアキラ」とあります。プリスキラの方が、しっかりしていて、よくわかっていて、若き伝道者に適切に助言することができたのです。後は、プリスキラとアキラの順です。彼女が活躍していくのです。第3回伝道旅行でエフェソにて伝道がなされた後、パウロは、世界の中心地ローマへの伝道を志していたのですが、どうもプリスキラとアキラは、先回りをしてローマに行っているのです。さきがけとして、地ならしをしているのです。ローマの信徒へ手紙 16:3-4「キリスト・イエスに結ばれてわたしの協力者となっているプリスキラとアキラによろしく。命がけでわたしの命を守ってくれたこの人たちに、わたしたちだけでなく、異邦人のすべての教会が感謝しています。」

先ほど紹介しました『パウロ—愛と赦しの物語—』の映画にも、このプリスキラとアキラは登場していました。ローマの迫害が厳しかった教会で、二人が中心になって支えている姿が描かれています。プリスキラは、たくましい女性として。群れのリーダーとして守っているのです。そして、その迫害が最も厳しくなった時に、群れを率いて、エフェソに逃れています。

エフェソの教会、パウロの同労者テモテも、中心的に指導していた場所です。テモテへの手紙の2の最後 4:19 にこうあります。

「プリスカとアキラに、そして、オネシフォロ家の人々によろしく伝えてください。」とあります。ここでは、プリスカとあります。プリスカ、その変化としてプリスキラのようなのですが、その意味は「小さな老婦人」という意味だそうです。小さな老婦人プリスキラ。しかし、大きな大きな働きを担っているのです。

3、まとめ

みなさん、こうして、使徒言行録の中でも、よく注意していないと見過ごしてしまうようなところにも、いぶし銀のようにとても大事な働きがあるのです。伝道というと、表に立って道を切り拓いていく伝道とか、伝道者が目立つところがあるかと思えます。表にはあまり出ないところで、わき役のように影を潜めながら、良い働きもまたあるということを今日は心に留めたいと思えます。

伝道というと、教勢としての数字によって一喜一憂ということがよくあるかと思えます。教勢信仰というのでしょうか。データ信仰というのでしょうか。コンピュータがはじき出したグラフばかりにとらわれて、右肩下がりだから、ああだめだ。もう我々は消滅すると思込む。せめて自分たちの生きている間だけは、このまま進んでもらいたいものだと、なんかもうあきらめムードがあるかと思えます。でも、皆さん、聖書よく読んでみますと、そういう数字にあらわされない部分もたくさんあるのであります。人数としては少ないが、その小さな群れが、その地域全体を支えるような重要な働きであったり、存在であったりもする。そして、その働きも豊かであります。バラエティーとも言えます。

今日とりあげたような、バルナバ、ヨハネ・マルコ、ルカ、プリスキラのように粒が立ってくる伝道。一人ひとりが、粒が立ってくる。そういう持ち味を発揮してくる伝道があるということです。

最後に、少しだけわたしが、現在仕えております、ユーカリが丘教会のことを紹介いたしましょう。詳しいことは省略いたしますが、わたしは赴任して今年目になります。この教会は開拓されてから40年経っていますが、40年目にして、教会はまた、再開拓されたような感じでしょうか。詳しくはお話できませんが、大きな試練があって、教会員が半減して立ち直るのに時間がかかりました。ようやく落ち着いてきたところでしょうね。それにコロナ禍が加わりました。いわば、二重の試練が襲い掛かったかのようにあります。しかし、内部的には、それほどダメージを受けたというよりも、むしろ、充実して、けっこう元気で、前進しつつあるのです。それは、何か強がって言っているわけではなくて、本当のことなのです。その一番大きなポイントは、礼拝によるのです。試練の中だったからこそ、礼拝に集中したのです。また、コロナ禍を通して、配信という形で、また礼拝が広がっています。ユーカリが丘という地域を超えて、広くつながるようになっていきます。遠隔地の方が会員になられるようになっていきます。配信を通して、同時礼拝のようになっていきます。

また、試練を通して、教会は規模を縮小したかのように、今まで、あまり表に出て来なかった方々が、新しく担い手になって活躍されるようになってきました。教会には、

いろいろな人材がおられます。まさに粒ぞろいというところでしょうか。そのことがよくわかるのです。この方にこんな賜物があつたということに感謝のうちに見出しているのです。

教会としても、このコロナ禍の中で新しい動きが出てきました。今までも月に一度、八街市にあります八街少年院におきまして、教誨活動を通して伝道を続けております。それに加えて、がん哲学外来カフェを開始しようと今、準備をしています。当教会だけでなく、北総地区のいくつかの教会と協力して来年度立ち上げようと準備しています。

また、現在、二人の方が、教職者になるための準備をして、そのための学びを教会の中でしております。なんでユーカリが丘教会に、そのような献身者が次々出てくるのか？不思議でしょう？いくつかの開拓伝道、また再開拓の課題を抱えておりまして、いづれ展開をと願って準備をしております。ここまでお話してお気づきになられたかと思いますが、実は、ユーカリが丘教会は、千葉のアンティオキア教会となることを目指しております。その祈りと幻を与えられて進んでいます。アキラとプリスキラもいれば、バルナバもいれば、ヨハネ・マルコや、ルカもいるのです。そしてこのことはもちろんユーカリが丘教会のことだけではありません。すべての教会で、その礼拝の場から、聖霊によって起こされていくことです。

わたしは、房総伝道、日本伝道を決してあきらめていません。聖霊が降る時に、教会は力を与えられて地の果てまでの伝道が進んでいくことになっているのです。教会にはその底力があります。千葉支区の中でも、東京教区の中でも、伝道の新たなうねりが、起こされることを期待して、この講演を終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。